

磐城高校とは その5

高校入学者選抜の大きな変革の中で、いわき全体の公立高等学校の志願倍率が軒並み落ちている。もはや、いわき地区に子供がいなくなっているのと同時に、高校入学者選抜のあおりで、私立高校への専願志願が急激に増えている。これほどまでに世の中は安定志向になったのかと目を丸くするばかりだ。ちなみに、本校の志願倍率も1倍を少し上回ったぐらいである。

かつて、私たちが高校入学者選抜を受けた時代には、200人を超える浪人生が受験し、各クラスが47人だとすると20人以上が浪人生だった記憶がある。そのころは47人の10クラスだから、470人の定員のところに680人ぐらいは受験していたことになる。倍率は1,5倍になんなんとしていたのだ。

桜が丘の前身の磐城女子高もにた様子であったから、併せて400人を超える浪人生が石島公民館に通っていたのだ。

その時と比べることは難しいが、280人の定員に対して、300人も受験しない状況はどうなのだろう。学びの魅力がなくなったのか。大学に行くための学びのために違うルートを取るようになったのか。しばらくは検証しなければならない。

現実、本校から難関大学に志願する意欲を持った生徒を育てるためのシステムを構築しているのは間違いない。様々な取り組みにより、きちんと自分で考え表現できる生徒の育成のためにいろいろな手法をとってきた。文武両道としてのインプットとアウトプットをらせんのように繰り返しながら、これからの人生における生きる力を身に着ける授業を展開している自負もある。

こうなったら、もはや人任せにせず、もう一度実践的授業者としての自分を高めていく必要も考えなければならない。私立高校の取り組みとは違った一派ひとからげではない一人一人の魅力を引き出す、幼少時からの20年計画的な教育の展開が必要なのだろう。

まさしくその取り組みを今動いていかないと、孫世代にに申し訳が立たない。共同体としての地域の魅力を発信して、学ぶ力を育成するいろいろな仕掛けを組み立てなければならない。そうしないと地域から子供たちがいなくなってしまう。これは日本全体の問題でもある。あと20年たっても生き残る取り組みを始めるべきである。既存のシステムをもっと工夫して説明責任に耐えうる教育力を持つことが必要だ。

卒業生も在校生も、そのために力を貸してほしい。人が人をつながるときに、大きな力を生み出すので、あなたたちが核力を見出して、この地へ舞い戻り綿々と続く取り組みを維持し地域の人々とともに活動を持続しよう。待ってますよ。

